

会話における割り込みと発話の順番取りシステムに関する一考察¹

李 孝謹

要 旨

本研究は現話者の発話を途中で中断させる聞き手からの割り込み発話に焦点を当て、その特徴からなぜ割り込みが生じるのか、またその割り込みによって生じた発話順番システム上の問題がおきた場合、話参加者はどのように対処していくのかについて分析を行った。その結果、発話開始の表明が相手に伝わらなかったことや発話終了の予測が困難であること、聞き手の発話開始への強い意志が見られる場合に割り込みが起きた。このような割り込み発話は現話者の発話順番を侵害することとなるが、会話参加者全員あるいは現話者に発話開始をアピールすることで発話順番を再構築することが観察された。

キーワード

割り込み発話 会話分析 順番取りシステム ターン完了

1 はじめに

会話のほとんどの場合、会話参加者の間には一度に 1 人が話すことが暗黙的に了承され、聞き手には現在の話し手の発話を最後まで聞くことが期待される。しかし、実際の会話には、断片 1 のように、1 人の話者が発話している際にもう一人の話者が自分の発話を開始する現象が多く見られる。つまり、実際の会話における話し手の発話はその開始から終了までのターンが保障されるとは限らない。

【断片 1: 過去の話】

- 1M : °ち[がう。°
→2K : [自分(.)自分が生んだ時の[なし。
→3M : [うん(0.3)産んだときの話よ。
4M : もう[ええわ。
→5I : [ね[::なんか
→6M : [ワープしちゃった(.)ワープしちゃった。=

¹ 本稿は 2011 年度世界日本語教育研究大会で発表したものを修正したものである。

Sack, Schegloff & Jefferson(1974)は次に誰が話すかに関する発話順番交代システム²を提唱し、会話参加者が次話者を選択する問題に取り組むときは、「現在の話し手の発話が終わり、誰が話してもいい場所」という発話移行適切な場所(Transition Relevance Place)でなければならないと述べている。断片 1 での 2, 3, 5, 6 行目の発話は発話移行の適切な場所ではなく、現在進行中の話し手のターンを侵害する行為となる。特に 6M のような割り込みは相手の発話を中断させることで会話の進行を妨げる問題となり得る。このような割り込み現象はターンの順番をめぐって会話参加者が競合している際に多く見られる。しかし、会話参加者はなぜそこで、そのタイミングで割り込みを行ったのか、またなぜ割り込み話者はそれが適切な行為のようにふるまっているのかについてはあまり議論されていない。そして、そのような割り込みによって生じる発話順番交代システムの問題を会話参加者はどのように解決するのかに関する研究は管見の限り見当たらない。

本稿では話し手の発話を中断させる形で現れる聞き手の割り込み発話を取り上げ、その特徴からなぜ割り込みが生じるのかについて記述し、割り込み発話によって生じた発話順番交代の問題を解決するための積極的な手段としてさらに割り込みを用いることを明らかにする。そして、そのような割り込みはどのような特徴を持っているのかについて考察を行う。

2 先行研究

割り込み発話は発話の順番に関わる言語行為であり、それによって相手の現在進行中の発話が中断されたり、相手の発話と自分の割り込み発話が重なったりする。言い換えれば、重なりは発話順番をめぐって競合する場合に生じる割り込みの結果である。そのような重なりに関する研究として串田(2005)がある。

串田(2005)は相手より遅れてターンを開始し、自分のターンが完了しないうちに相手が発話を中断ないし完了すること、人が同時に発話を開始することで生じるオーバーラップ発話がどのようにして完成されるかを分析している。その中でターンの順番をめぐって競合する場合のみ考えると、オーバーラップ発話すなわち重なりはそのターンの冒頭部分を繰り返すことによって完成される。つまり、割り込みすることで重なりが生じた場合、自分の発話の冒頭部分を繰り返すことでターンを完了することが出来る。この研究は発話が重なった場合に相手より遅れてターンを開始した話者のターンの組み立て方に焦点を当てているため、割り込みがなぜ生じたのか、割り込みに対する先行話者の観点からの考察、つまり自分のターンをどう組み立て直すのかについては考察されていない。

また、割り込みの機能について論じた研究として野村(1993)と田中(1998)がある。野村(1993)は会話参加者が予測可能かつ話題転換が必要な場面での割り込みを観察し、その機能として会話の展開が停滞したり、発話の素材的な意味が希薄になったりした時、この展

² 発話順番取りシステム(Sacks et al 1974)

1)現在の話者の次話者選択, 2)現在の話者以外の参加者による自己選択, 3)現在の話者による自己選択

開をさらに推進するものや話し手に何らかの働きかけをすることを挙げている。この研究では「すごい」「怖い」など、感情表現は話題を展開させる働きが希薄であるとし、会話参加者は割り込みという手段をもって積極的に話題の停滞を打開すると分析している。そして、聞き手が話題の転換を試みる時にも割り込み発話を用いるが、その場合は「あ」や「あっ」などの標識を伴うとしている。つまり、割り込み発話は会話の展開に関わる要素であり、話題の転換を促す言語行動にもなり得るとしている。

最後に田中(1998)では話し手の発話が完全に終わらないうちに、話し手の発話内容を予測して発話する「先取り」について分析している。田中(1998)自身も「先取り」と割り込みについて多少の異なりが見られるとしているものの、相手の発話が完全に終わる前に聞き手が発話を開始するということは共通点と言える。つまり、割り込み発話の内容とそれまでの話し手の発話内容との間に関連性が見出される場合は先取り発話として解釈することができ、その機能については、相手の発話内容への理解の表示、相手の発話や話題の打ち切りなどが明らかになっている。

以上の研究では割り込みという現象が単なる発話交替のシステムに反する誤りではなく、会話の進行にかかわる手立てとして用いられることが分かった。しかし、割り込みは発話順番にかかわる言語行為である以上、相互行為上の発話順番の問題に焦点を当てた研究が必要である。

3 本稿で扱う割り込みと研究方法

本稿ではまず割り込み発話によって話し手の発話が中断される場合と割り込み発話と話し手の発話が重なってはいるものの、話し手の発話は終結している場合を便宜上区別する。そして、前者に対してのみ割り込み発話という用語を使用する。2 節でも少し触れたが、割り込み発話は発話順番にかかわる話者の言語行為であり、その結果としてほとんどの場合になりが生じる。しかし、割り込み発話による重なり発話においても先行発話が中断される場合や後続の割り込み発話を取りやめる場合などが考えられる。また、先行発話が中断され、割り込み発話が続く場合には重なりが生じないこともある。したがって、本稿では割り込みの中でも以下の例のように話し手の発話が完全に終結する前に聞き手が発話を開始することで話し手の発話が中断される現象に焦点を当てて分析する。なお、話し手の発話が割り込みによって中断されず、終結を迎えた場合は分析の対象から除く。

5I : [ね[::なんか
→6M : [ワープしちゃった(.)ワープしちゃった.=

(断片 1 の一部再掲)

分析するにあたって現在の話し手の発話は終わっているのか、あるいは終結に向かっていくのかを判断することは非常に難しい課題である。そのため、本稿では会話分析の手法

を取り入れて分析を試みる。会話分析は発話終結の判断材料である文末のイントネーション、沈黙、身体の動き、視線などを精密に見ること、割り込みによって生じた発話順番交代の問題を解決するための相互行為を見るためにも有効な手法であると思われる。ただし、会話分析はデータを精密に分析しながら現象を記述する手法であるため、定量的分析には限界がある。そのため、本研究は 50 代女性の雑談という場面の事例研究にすぎないかも知れない。しかし、なるべく話者の属性や会話の環境を排除した上で、割り込みが生じる現象を分析することでより一般的な記述を進めていきたい。分析データは 50 代の女性、4 人の会話を録音・録画したもの約 30 分である³。データでの割り込みは計 58 回⁴である。

4 分析

4.1 割り込みの特徴

本節では会話に現れる割り込みの特徴を探ることによってなぜ割り込みが生じるのかについて考察を試みる。複数の会話参加者による会話においては一般的に割り込みが生じやすいが、それが意図的であろうが偶然であろうが、様々な要因が絡み合う複雑な割り込みが多い。割り込みが生じる原因として本節では「発話開始の表明への困難」、「発話終結の予測の困難」、「聞き手の強い発話開始」の 3 つの要因について考察していくが、いずれも発話順番交代システムにかかわる問題である。以下の断片 2 は 4 人の会話が 2 人ずつ分かれて行われた後、話者 I が相手グループの会話の内容を聞くことから始まる。断片 2 の直前では話者 I と Y の会話、話者 M と K の会話が行われていて、1 行目では話者 M と K の過去に娘を産んだ時の話について話者 I が尋ねている。

【断片 2: 過去の話(断片 1 の再掲)】

- 1I : [[あの何の話。
2K : [[°びっくりした°
3M : °ち[がう°
4K : [自分(.)自分が生んだときは[なし。
5M : [うん(0.3)産んだときの話よ。
6M : もう[ええわ
7I : [ね[::なんか
8M : [ワープしちゃった(.)[ワープしちゃった=
9I : =ワープしてるなんか[帽子が
10K : [30 年もまえ
11M : それあたしの帽子

³ データは 2010 年度筑波大学の応用言語学演習の授業で収集したものである(砂川コーパス)。

⁴ 本研究での分析対象である割り込み以外に話し手の発話の途中で相手からの発話が始まった場合を含む

4.1.1 発話開始の表明への困難による割り込み

断片 2 ではいくつかの割り込みが生じているが、特に話し手の発話を中断させている 8M と 10K の割り込みについて分析する。まず、8M の割り込みは 7I の発話の冒頭とも言えるところで、非常に早い時点で起きている。その結果、重なりは生じているものの、7I の発話は「なんか」の次で中断されている。

それではまず、なぜここで割り込みが生じたのかについて見てみよう。会話参加者が発話を開始する時には「ターン開始要素 *turn entry devices*⁵」として特定の言語形式を使用し、聞き手の注意を引きつける。そうすることで参加者は話し手としてふるまうことができ、次話者としての権利が得られる。話者 I は相手グループの会話内容を確認した後(5M)、7I で畳の上の帽子をとりながら「ね」「なんか」と相手の注意を引いている。しかし 8M で、ほぼ同時的ではあるが、自分達のグループ会話の内容についての補足説明が行われており、引き続き過去の話が続くことを表明している。8M では 7I の発話を中断させながら「過去に子供を産んだ話」を今この場で行っていることが「過去にワープしている」と述べている。したがって、7I の相づちを用いた発話開始は他の会話参加者の注意を引くためには十分でなかったと言える。それでは 7I の「ターン開始要素」で注意喚起の「ね」と「なんか」が用いられているにもかかわらず、M や他の会話参加者に受け入れられなかったのはなぜだろうか。

複数の会話参加者による会話では、聞き手を「話しかけられた者 *addressed hearer*」と「話しかけられていない者 *unaddressed hearer*」とに分けることができる。後者は前者より会話の進行とのかかわりが弱く、消極的な立場である。会話参加者の視線は「話しかけられた者」と「話しかけられていない者」を判別するために有効な手段である。視線は話し手と聞き手との間の話の進行を確認する要素の 1 つであり、お互いの目が合っていることは同じ話に従事していることを表す(中井 2003)。それと同時に目が合っていない参加者は話に直接的に参加せず、傍観者としてふるまうことになる。断片 2 では、現在の話題についての 1I の質問から始まった M と K の応答が「昔、子供を産んだ時の話」という説明になっている。そこで 5M、6M での視線は K に向けられていてお互いに会話を構築していく。つまり、6M での話し手に対する「話しかけられた者」は話者 K であり、I は「話しかけられていない者」になる。そのような「話しかけられていない者」(話者 I)が会話の進行にかかわろうとする際には会話の参加への強い手続きが必要であろう。つまり、傍観者としての話者 I が会話に直接参加するためには話者 M と K の視線を自分の方に向けさせる必要がある。また、声を出すことも相手の注意を引く手段であるが、6M の発話が終結する前に 7I の発話を開始しているため、発話開始の手続きを M に認識され難い状況になっている。したがって、話者 I は「話しかけられていない者」として M と K の注意を引くことが困難となり、発話開始への表明が他の参加者に十分伝わらなかった。以上のことから発話順番

⁵ 「ターン開始要素 *turn entry devices*」(Sacks, Schegloff, Jefferson 1974)

をめぐって 2 人以上が競合する際、会話の進行に直接かかわっていない話者が発話を始めようとする場合にその発話開始への表明が他の参加者に認識できないと発話の冒頭での割り込みが生じやすいことが分かった。

4.1.2 発話終結の予測の困難さによる割り込み

次に話し手の発話がいつ終わるのかを予測することが難しい場合、聞き手からの割り込みが生じやすい。同じく断片 2 を見てみよう。10K の割り込みは 9I の発話の途中で起きている。9I の発話の形式を見ると「ワープしてる」と「なんか帽子が」という意味的に連続性のない二つの発話の間には沈黙がなく、発話が終わったという印象は受けない。しかし、9I の発話の冒頭は 8M の発話に対する繰り返しの相づちであると判断でき、「ワープしてる」までが一つの意味内容を持ったターンとなる。その後、話者 I は 7I で中断されたターンを 7I の冒頭部分である「なんか」を繰り返すことで再び開始しようとする。しかし、8M の「ワープしてる」を繰り返したことによって他の参加者には 9I の相づちが先に認識されてしまう結果となった。つまり、9I の冒頭の相づちは発話順番を取るための積極的な行為として認識されなかったため、割り込みが誘発されたと考えられる。このように話者 K は話者 I の発話の終結を予測したうえで自分の発話を開始しているが、発話の終結を予測するための素材として 9I のターンの組み立て方は不十分であった。

また、改めて話者 I の発話を見てみると、7I で「ね」「なんか」という「ターン開始要素」を用いて何らかの発話を開始している。しかし、割り込みによって中断されたため、9I で「なんか帽子が」と言いながら再び発話の開始を図っている。ここで話者 I は実際に手に帽子を持っていて自分がこれから話題としたいものを他の会話参加者にアピールしている。話者 I はこのような行動を「ターン開始要素」として発話をデザインしているが、その行動は「ワープしてる」という発話とずれており、しかもその行動を話者 K は見ていないためにその行動の話題性が認識されなかった。会話参加者が新たに発話を開始するタイミングは、現話者の発話が終結しているあるいは終結するだろうという予測できる時点が適切である。しかし、現話者が発話順番を取るという意志が明確ではない繰り返しの相づちを発話の冒頭にデザインする場合は、その繰り返しの発話が 1 つのターンとして認識されるため、すなわち 1 つのターンとして完結するだろうと予測されるため、割り込みが生じやすい。そして、自分がターンを開始するための発話のデザインと行動が一致せず、相手の注意を引きつけることができない場合に割り込みは生じやすい。以上のような要因が発話終結の予測を不可能にし、割り込みが生じたと考えられる。

4.1.3 聞き手の強い発話開始の表明による割り込み

前節では割り込みが生じやすい状況について話し手の立場から発話開始のデザインを手がかりに分析した。本節では聞き手の発話デザインに注目して割り込みが生じる要因について分析を試みる。割り込みが生じやすい状況とは別に、聞き手としてふるまっている

会話参加者が何らかの理由で話し手の発話順番を取るような割り込みも会話では多く見られる。断片 3 では話者 I と M による昼のドラマに関する会話のやりとりが主として行われている。

【断片 3: 昼のドラマ】

- 1M: ま=
2I: =今は=
3M: =お昼でやってる。
4I: [[愛する人へ
5Y: [[へ:.....[:
6M: [見ないけど.(0.7)なんか:だっ=
7I: =あ(.)そうだそうだ(0.5)この前聞かれたんだっけ。
8 (1)
9I: え::とね(1.5)h これ知ってるって言われたんだ。
10I: そのへんに>かいてきた<(0.7)顔と心と
11K: うん

5Y までは韓国の昼ドラマの話が続いており、話者 M は 6 行目で「愛する人へ」というドラマを見ていないことについて発話している。詳しく見ると、6M は「見ないけど」と言いさし後に 0.7 秒の沈黙があり、また「見ないけど」の文末イントネーションは下降調であるため、0.7 秒の沈黙では誰が発話しても良い場所である。そこで話者 M は次に「なんか」と言いながら会話を開始している。つまり、話者 M は引き続き、「なんか」と発話することで自話者選択による発話を開始し、さらに「だっ」と発話することで発話を続けようとしている。次の瞬間に話者 I は比較的大きくて高い音調で「あ」と「そうだそうだ」という「ターン開始要素」を用いながら割り込んできている。そして上半身を後ろに向け、かばんの中から何かを探す行動をとっている。話者 I の割り込み発話は、何かを思い出したという言語形式と身体の動きを伴うことで他の会話参加者への注意喚起がより強くなる。そして、そのような会話のデザインは自ら展開する話題が今このタイミングで言わなければならないという緊迫性を他の参加者に感じさせるものである。

発話順番をめぐる 2 人以上が競合する際には、1 度に 1 人が話すという会話のルールに従うためにもどちらかが発話を取りやめることで問題を解決する(串田 2005)。6M の発話は話者 I に向けられており、その話しかけられた者からの割り込みという強い意志を持った発話順番取りの仕方は、話者 M にとって自分の発話を中断せざるを得ない要因になったと考えられる。ここで、聞き手からの割り込みについて 1 つ考えなければならない問題がある。発話順番ルールに違反してまで自分の言いたいことを他の参加者に発信するということはその話の内容が緊急性を要するものであること、相手もしくは他の参加者にとっ

て自分の話はまさに今聞くに値するものであることを意味する。7I では気づきの標識を用いて割り込みを行い、「この前聞かれたんだっけ」とこれから言うことに対する前置きをしている。そして、かばんから何かを探す行動が続くことによって他の参加者は「何かは分からないが、前から気になっていることを今話題として取り出す話者 I」に注意を向けることとなる。9I ではかばんから取り出した手帳を見せながら「これ」と指し示すことでより参加者の注意を向けさせている。ここでようやく話者 I はこの前聞かれたドラマのタイトルを知らず、ここでみんなに聞きたかったことが他の参加者に暗示的に伝わっている。気づきからその後の発話デザインの仕方を見ると、これからする話というのは緊急性を要するものであることが感じ取れる。また、それまでの話題(韓国のドラマ)と関連する内容である点からも話者 I の割り込み発話は今までの話題の流れに沿っていること、つまり今ここで必要な話をするための手続きとして問題がないようにふるまわれている。

以上のことから話者 I は発話順番取りの緊急性がある場合に、発話開始への強い意志を持って自分の発話をデザインすることによって割り込みが生じる。

4.1.4 まとめ

4.1 節では割り込みの特徴を探ることで、なぜ割り込みが生じるのかについて分析を試みた。会話において 1 人の話者が発話順番に対して権利を獲得し、話し手としてふるまっているということは、自分の発話が終結するまで他の話者は聞き手としてふるまうことを意味する。しかし、現話者の発話が終わる前に聞き手が発話を開始することで現話者が自分の発話を取りやめる場合がある。このような会話の割り込みは 2 人以上の話者が発話順番をめぐる競争する際に頻繁に生じるが、今回の観察では「発話開始の表明への困難さによる割り込み」と「発話終結の予測の困難さによる割り込み」、「聞き手の強い発話開始の表明による割り込み」が見られた。

まず、発話を開始する際に用いられる「ターン開始要素」や参加者の注意を引く手続きなどが他の会話参加者に発話開始の表明として十分にアピールできない場合、割り込みが生じる。さらに複数の会話参加者による会話においては、話し手と話しかけられているものの以外の参加者による発話開始の場合に発話開始の表明が難しく、割り込みが生じやすい。次に話し手の発話が相づちといった発話順番を取るための積極性が欠けている場合、聞き手は発話終結の予測が困難となり、割り込みが生じやすい。最後に、聞き手の強い発話開始による割り込みは、何かを思い出した時に意識的に相手の発話を止め、自分の話題を展開していく場合に生じる。なお、この種の割り込みは現話者に発話順番に対する権利を直接訴えかけるものであるため、重なりはほとんど生じない。以上の 3 つの場合は、いずれも 1 度に 1 人が話すというルールに従って現話者が自分の発話を取りやめるため、会話の進行上の問題となり得る。

以上のように割り込みはさまざまな要因が絡まっているが、特に話し手の発話のデザインや会話の状況などによって生じるもの、言わば偶発的な割り込みが多い。また、聞き手

からの積極的な発話開始による割り込みも見られたが、それについては次節でより詳しく検討していく。4.2 節では聞き手が意識的に行う割り込みについて観察し、なぜ割り込みをするのかについて分析する。

4.2 発話順番を取り戻すための割り込み

4.2.1 会話参加者全員にアピールする割り込み

会話の途中で自分の発話が何らかの理由により中断された場合、会話参加者はその発話を取りやめるかあるいは一旦取り止めた後再び開始するかを選択に迫られる。後者の場合、自分の発話が中断されてから最短の距離で話を再開するために割り込みをすることがある。このような割り込みは 4.1.3 節で見た割り込みより積極的であるとも言える。次の断片 4 を見よう。

【断片 4: コレステロール】

- 1M: あるよ? 持って行けば(.)天ぷらするひと.
2 (1.5)
3I: うん(0.5)[いい天ぷらしない.
4Y: [hhh 天ぷら(しない.)
5K: >そう<=
6M: =昨日=
7K: =あたしだってさ
8I: うんうん
9K: この間あの::血液検査したら
10K: ¥コレステロールが多いです¥ってかかれ[ちゃった.
11I: [ダメじゃん. 天ぷら.

断片 4 では話題⁶「天ぷら」から話題「コレステロール」に転換する場面で、ここでは 7K の割り込み発話に注目する。3 行目と 4 行目では発話の重なりが起きているが(同時発話)、どちらも文末イントネーションが下がっていてターンが終わっている。4 行目の次は発話順番移行が適切な場所である。そこで話者 K は 5 行目で次の発話者となり、「そう」という「ターン開始要素」を用いて何かに気づいたように発話を開始することで次の発話順番における優先的な立場を得ている。しかし、6M で「昨日」と割り込みが起きており、5K の発話が中断されている。ここで発話順番をめぐる競争することになり、話者 K は

⁶ 会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体であり、その発話の集合体に共通した概念を「話題」とする。(三牧 1999)

7K で再び割り込むことで発話順番を譲らず自らの発話を続けている。

まず、割り込みが起きた場面における両者の身体的な動きを見る。4Y までお茶を飲みながら聞いていた話者 K と M はそれぞれ湯呑みを口の近くに持っていたが、話者 M が先に湯呑みをテーブルに置くことで何か発話することを表明している。一方、話者 K はお茶のカップを口の近くに持ったまま下を向いていて、比較的小さい声で「そう」と先に発話するが、それまでの話者 M の行動(湯呑みをテーブルに置く)には気づいていない。その後、話者 M は話者 K の発話開始に一步遅れた形で発話を開始し(6M の割り込み)、話者 K は湯呑みをテーブルに置きながら発話を続けている(7K の割り込み)。

以上のような場面で、割り込みがなぜ起きてしまったのかについて考えてみよう。まず、割り込み発話の中で 6M の割り込みについて見ると、会話参加者の一連の行動は李(1999)の物語の開始のための言語表現である「話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする」「他の会話参加者の興味を引く」という言語行動から説明できる。話者 M の行動は、湯呑みを口からテーブルに持っていくことが、「話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする」ことにもなり得るが、会話参加者全員、特に現在発話順番をとっている話者 K にそれを気付かせることはできなかった。実際に湯呑みをテーブルの上に置くという行動は、発話開始への標識以外に「お茶を飲み終えた」という解釈も可能である。このような場面は 4.1 節で見えてきたように発話開始への表明が不十分であることが、話者 M の偶発的な割り込みの原因であると考えられる。したがって、誰でも発話していい状況で話をするといった態勢を示さなかったことや比較的小さい声で相手にアピールできなかったことが話者 M の割り込みを誘発したと考えられる。

以上のことと関連し、次は自分の発話権を侵害するような割り込みはどう対応するのかについて見てみよう(7K の割り込み)。話者 K の場合は 5K の「そう」は気づきの標識が話者 M の注意を引くことに一度失敗したものの、その次の 7K で 6M より大きい音調で「あたしだっさ」と発話することで「話者 M と他の会話参加者の興味を引く」ことに成功している。そして、話者 K は 7K の発話で視線を話者 Y に向け、これから話すという姿勢を見せることで話者 M 以外にも発話開始へのアピールをしている。つまり、割り込んできた相手にはより大きい声で働きかけ、そして他の参加者に視線を向けながら割り込みをすることで自分のターンを取り戻している。その結果、8I の「うんうん」は話者 K に向けたあいづちで続きの発話を促し、話者 M は自身の発話を取りやめている。

以上のことから、発話順番をめぐる偶発的な割り込みが生じた場合、意図的な割り込みは一度中断された自分の発話を再開するために有効であることが分かった。ここで、いかに他の会話参加者の興味を引くか、またその結果として聞き手から発話に対する許可を得られるかが重要であると考えられる。そのためにはまず相手にこれから話すという気持ちをアピールすること、次に他の会話参加者の了承を得ることが必要で、声の大きさや視線などといった手段が重要であることがわかった。このことは 4.1.3 節で分析した「聞き手の強い発話開始による割り込み」と同様な結果ではあるが、発話順番の交替において生

じた問題を解決するために用いられている点では、より妥当な割り込みとして他の参加者に認識されると考えられる。

4.2.2 発話順番をめぐる相手に直接交渉する割り込み

発話順番を取り戻すための割り込みについて他の例を見てみよう。断片 5 では 10M の意図的な割り込みに注目する。9I での話者 I と M の視線はお互いに向けられており、9I の割り込み発話を両者とも認識していることが分かる。そのため、話者 I と M の間では発話順番に対する直接交渉が行われることになる。つまり、ここでは断片 4 とは異なり、9I の発話はその前の 8M の発話を聞いていながらも割り込んできている。それに対して話者 M も話者 I の割り込み発話を聞き、それを阻止するために割り込み発話を用いている。このような割り込みの連鎖は、今まで見てきた割り込みの中でもっとも積極的なものである。

断片 5

1I : デッセヨ(.)これミヤモさんちの(.)あべかわ=

2M : =うんうんおとっ[ちゃんの

3I : [それなんかお尻でつぶしちゃった(0.5)ほら形が変でしょう？

4I : [[デレンー

5M : [[(これ)誰のお尻でって言ったら hhh.

6I : あっためといた(.)お尻で.

7 : (0.8)

8M : といま=

9I : =いつの間にか=

10M : =いまさ::大事な時だから(0.5)あのお茶とか

11M : <話しかけないでくださいっつうの°.

12I : あ、そうなの？=

13K : =あ::まだやって[る？

まず、なぜ話者 I は相手の発話を聞いていながらも割り込んできたのかについてみよう。6I までの会話では、4 人のうち話者 I と M が安倍川餅の話をしており、その内容を他の会話参加者に伝えている。5M と 6I のやりとりは、他の会話参加者に安倍川餅を誰がお尻でつぶしたのかという事実を伝える質問と応答のペアになっている。つまり、ここでの話題に対する主な会話参加者は話者 I と M である。そして、6I の文末は下がっており、次に 0.8 秒の沈黙があるため、安倍川餅に対する話題は一旦終わったと考えられる。7 行目は誰が話し始めてもいい場所であり、話者 M が「といま」と話し始めている。以上のことを分析すると、9I の割り込みは「発話開始の表明への困難による割り込み」と同様な原因が考えられる。8M の「といま」という発話が前の話題すなわち安倍川餅との関連する内容な

のかは不明であり、9Iの割り込みは話題がまだ続くと予測して安倍川餅の話を続けている。6行目での話者Iの発話はその意味内容から見ても完了しているが、話者Iの視線は餅に向けられていてそれに関連する何らかの発話を加えることを表明している。8行目でMは次の話者として発話を開始するが、Mの視線はYとKに向けられているために話者Iの視線には気づいていない。したがって、話者Iは話者Mに話題を続けていくことを十分にアピールすることが出来ず、尚且つ続きの発話である8Mの発話が以前の安倍川餅の話題の続きであろうと予測したため、割り込みを用いたと考えられる。

次、話者Iの割り込みによって生じた発話順番交替における問題を解決するための話者Mの手続き(10Mの割り込み発話)を見よう。発話の途中で自分の発話権が侵害された時、身体の動きを利用し、相手の注意を再度喚起することで発話権を維持することができる。8Mでは目立つ身体の動きはないまま発話されている。9Iは自分がお尻でつぶした安倍川餅を指しながら発話されており、音声と身体の動きをもって割り込んできている。つまり、9Iでの言語行動は、お尻でつぶした安倍川餅を指していることから現在の話題との関連性が強く、他の会話参加者にとっては割り込んできてもいいような発話であると思われるかもしれない。しかし、このような割り込みに対して話者Mは10Mで「いまさ」と繰り返し、手で話者Iの視線をさえぎるようにしながら自分の発話順番を再び取り戻そうとすることで相手に直接働きかけている。その結果、話者Mは自分の発話を最後まで続けることができ、また12行目の発話から見ると、割り込みを行った話者Iにも発話順番取りを承認されていることが分かる。つまり、一度割り込んできている相手の発話を見える形で止めると同時に割り込まれる前の発話を繰り返すこと、そして割り込んできた相手に直接働きかけながら割り込むことが自分の発話順番を取り戻す手立てとして用いられている。また、8Mの発話は安倍川餅の話題の続きではなく新しい話題への導入であるため、割り込みという手段を用いて自分のターンを取り戻す必要があったと考えられる。このように、ある程度妥当性を持った割り込み発話がなされた場合でも、先行話者の発話が新しい話題の導入のためであるならば、先行話者は手の動きなどを用いて割り込んできた相手に直接自分の発話の権利を訴えることができる。

4.2.3 まとめ

実際の会話では1度に1人が話すという会話のルールが存在しているにもかかわらず、割り込みが多く生じる。割り込みによって現話者の発話が中断されてしまう、すなわち発話順番交替の問題が生じた場合、積極的で意図的な割り込みを行うことで発話順番を取り戻すことができる。その場合、会話参加者全員にこれから話すということをアピールすることや、割り込んできた相手との直接的な交渉することで割り込みの正当性を保持できる。さらに、発話順番をめぐる競合する相手と直接交渉する場面での身体的な動きや視線などを伴う割り込みは、発話順番取りに有効な手段であると考えられる。

5. 考察と今後の課題

本稿では、会話の問題となりうる割り込み現象を会話参加者の相互行為の面から分析を行った。特に 4 人会話のデータを用いて、割り込みが起きやすい状況と発話順番交替上の問題が生じた場合、その解決策として用いられる割り込みについて考察を行った。その結果、①誰が話し始めてもいい場所、すなわち発話移行適切な場所(Transition Relevance Place)で他の会話参加者の「話す」というアピールに気づいてない場合や相手の発話がいつ終結するのかを予測することが困難な場合に割り込みは生じやすい。このことは逆の場合でも同様であり、割り込みされる側は声の小ささや話をするというアピールが他の会話参加者に十分に伝わっていない場合、割り込みは生じやすい。②割り込みに対応する、あるいは阻止する会話参加者の行動としては、直接割り込んできた相手に自分が話すという意志を働きかける割り込みと、さらに身体的な動きや視線などで直接働きかけながら割り込むことで 1 度中断された発話を再開することができる。このように、発話順番交替上の問題に対処するため会話参加者は割り込んできた相手の発話より大きい声で発話したり、身体的な動きを交えて相手の割り込み発話を中断させたりして自分の発話順番を維持することが分かった。本研究では割り込みを会話の進行上の問題とするならば、それを解決するためにも割り込みを用いてお互いに調整していることがわかった。

今回は会話における割り込みの特徴をデータの中から綿密に見るために会話分析の手法を用いたが、量的な研究にはならず、事例研究となっている。今後は量的な分析を試みて割り込みの機能について分析したい。

参考文献

- 金田純平 (2008) 「発話内における単位認定の問題点について—談話から見た文法単位の再検討—」『「単位」としての文と発話シリーズ 2』 71-94
- 串田秀也 (2005) 「参加の道具としての文—オーバーラップ—発話の再生と継続」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話シリーズ文と発話 1』 27-61
- 田中妙子 (1998) 「会話における「先取り」について」早稲田大学日本語研究教育センター紀要 10 17-40
- 中井陽子 (2003) 「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』 3 号 23-39
- 三牧陽子 (1999) 「初対面における話題選択スキーマとストラテジー - 大学生会話の分析 - 」『日本語教育』 103 号 49 - 58
- 李麗燕 (1999) 「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」 - 物語を開始するために話し手が使う言語表現を中心に - 」『日本語教育』 103 号 59 - 68
- 野村眞木夫 (1993) 「日常的な会話における話題の転換と割り込みの機能—会話の参加者のかかわりかたをめぐって—」『弘学大語文』 18/19 号 9-22
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson (1974) A Simplest Systematics for the

Organization of Turn-Taking for Conversation. Language 50

(李孝滢 筑波大学大学院生)

A note on conversational interruptions and turn-taking system

Hyokeun LEE

This paper's purpose is that find the cause of the conversational interruptions and how participants solve the problem of turn-taking system cause by the conversational interruptions. First of all, the conversational interruptions tend to occur in privative will of turn starter. It seems to back-channel and not enough to open a participants' eye's to turn starter. And there is conscious the conversational interruptions for something purpose of hearer's. Second participants solve the problem of turn-taking system how to exchange glances between speaker and another participants or use physical movement. So hearer can hold another participants' attention that make start hearer's turn.